

# 栄町龍角寺跡

—首都圏自然歩道整備事業埋蔵文化財調査報告書—

平成21年3月

千葉県環境生活部  
財團法人 千葉県教育振興財団

さかえ まち りゅう かく じ あと  
**栄町龍角寺跡**

—首都圏自然歩道整備事業埋蔵文化財調査報告書—



## 序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第622集として、千葉県環境生活部の首都圏自然歩道整備事業に伴って実施した龍角寺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良・平安時代の古代瓦を多数検出し、近接する古代寺院龍角寺やこの地域の歴史を知る上で多くの貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成21年3月

財団法人 千葉県教育振興財団

理事長 福島義弘

## 凡　　例

- 1 本書は、千葉県環境生活部による首都圏自然歩道整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、印旛郡栄町龍角寺245-1に所在する龍角寺跡（遺跡コード329-016）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県環境生活部の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財團が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は第1章に記載した。
- 5 本書の執筆及び編集は栗田が行った。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県環境生活部自然保护課、栄町教育委員会ほか多くの方々からご指導、ご協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図（第1図）は、国土地理院発行 1:25,000「成田」「下総滑川」、柏書房株式会社発行 1989『明治前期 関東平野地誌図集成』1:25,000「成田」「下総滑川」を合成した。
- 8 本書で使用した図面の方針はすべて座標北で、第2図は日本測地系、第3図は世界測地系による座標を使用した。

## 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査の経緯と経過.....	1
2 調査の方法と概要.....	1
3 遺跡の位置と歴史的環境.....	1
第2章 検出された遺構と遺物.....	5
第1節 奈良・平安時代.....	5
第2節 近世以降.....	22
第3章 まとめ.....	23
報告書抄録.....	卷末

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	2	第11図 平瓦Ⅱ類（3）.....	14
第2図 調査区域と周辺の地形.....	3	第12図 平瓦Ⅱ類（4）.....	15
第3図 遺構分布図.....	4	第13図 平瓦Ⅱ類（5）.....	16
第4図 軒丸瓦・軒平瓦.....	6	第14図 平瓦Ⅱ類（6）・平瓦Ⅲ類（1）.....	17
第5図 丸瓦（1）.....	7	第15図 平瓦Ⅲ類（2）.....	18
第6図 丸瓦（2）.....	8	第16図 平瓦Ⅲ類（3）・平瓦V類（1）.....	19
第7図 平瓦I類（1）.....	10	第17図 平瓦V類（2）.....	20
第8図 平瓦I類（2）.....	11	第18図 平瓦V類（3）.....	21
第9図 平瓦Ⅱ類（1）.....	12	第19図 文字瓦・道具瓦・転用砥石.....	22
第10図 平瓦Ⅱ類（2）.....	13		

## 図版目次

図版1 調査前風景	図版4 平瓦I類
SX-001全景	図版5 平瓦II類
A区全景	図版6 平瓦III類
図版2 軒丸瓦・軒平瓦	図版7 平瓦V類
図版3 丸瓦	図版8 平瓦拡大

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の経緯と経過

千葉県は、首都圏自然歩道整備事業に関連して、龍角寺地区の整備事業を計画した。実施にあたって、千葉県環境生活部から用地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会あてに提出され、その取り扱いについて慎重な協議が重ねられた。その結果、現状保存が困難な地点については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることで協議が整い、財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することになった。調査対象は、トイレ及びそれに伴う給排水設備設置に伴う87m<sup>2</sup>の範囲である。発掘調査は平成17年度に行った。

調査は、平成18年2月1日から2月22日まで行い、調査の結果、近世以降の土坑などが検出され、遺構内や表土中から多数の古代瓦片が出土した。

発掘調査及び整理作業に関わる各年度の組織・担当職員及び作業内容は以下のとおりである。

#### (1) 発掘調査

調査期間：平成18年2月1日～平成18年2月22日

内容：(上層) 本調査 87m<sup>2</sup>のうち87m<sup>2</sup>

(下層) 確認調査 87m<sup>2</sup>のうち4m<sup>2</sup>

組織：北部調査事務所長 古内 茂

担当者：上席研究員 渡邊高弘

#### (2) 整理作業

整理期間：平成20年12月1日～平成21年1月31日

内容：水洗・注記から報告書刊行まで

組織：整理課長 高田 博

担当者：主席研究員 栗田剛久

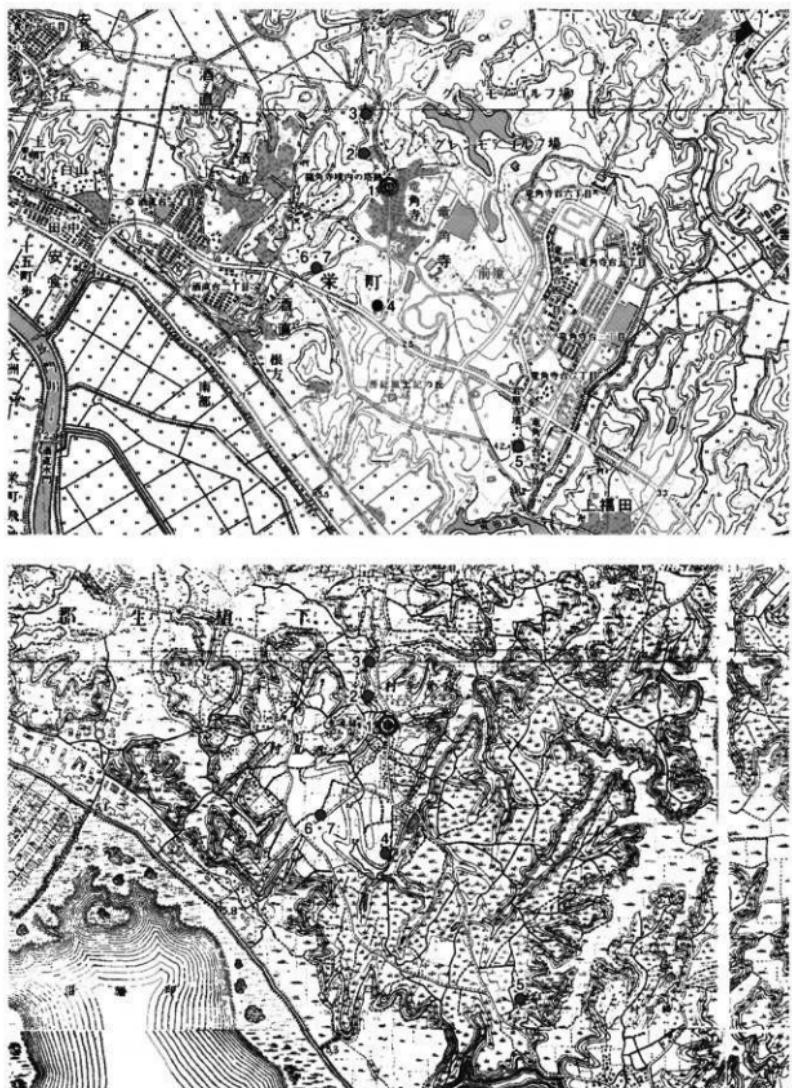
### 2 調査の方法と概要

調査にあたっては、調査面積が小さいため、グリッド設定は行わず、調査対象となる事業範囲を便宜上A区・B区・C区に分けて調査を進めた。上層遺構は、確認調査を省略し、A区から順次本調査を行った。調査の結果、地下式坑や掘立柱建物跡、台地整形区画などの遺構が検出された。これらの遺構はすべて近世以降の所産と思われ、多量に出土した古代瓦とは時期の異なるものであった。下層に関しては、B区中央にグリッドを設定して確認調査を行ったが、遺物の出土がないため本調査には至らなかった。

遺構は、その種別ごとに通し番号とし、遺物の取り上げは遺構及び区ごとに行った。また、実測は、公共座標（第IX系）をもとに、基準となる杭1・2を設定して行った。

### 3 遺跡の位置と歴史的環境

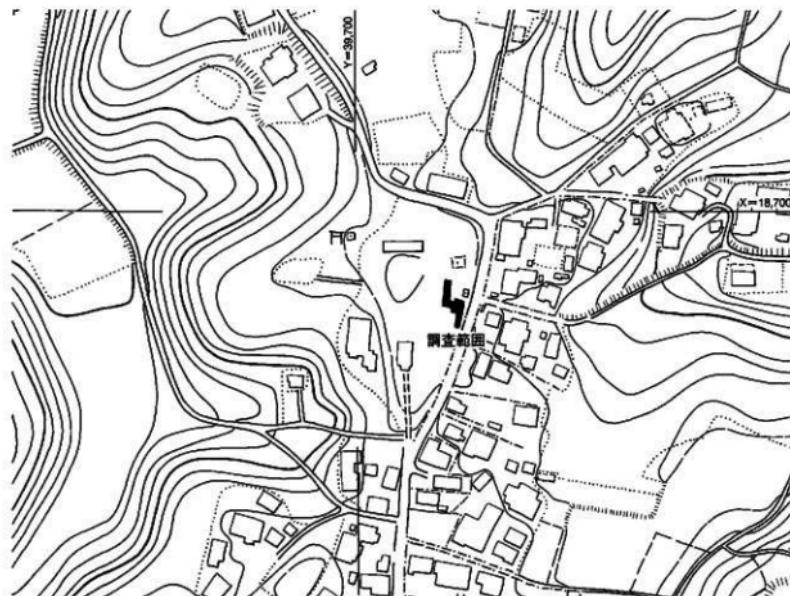
龍角寺跡は、印旛沼北部東岸、利根川沖積地から南に伸びる複雑な小支谷によって挟まれた南北に細長い標高30mほどの台地上に位置する。龍角寺は、昭和22・23年に滝口宏が調査したのをはじめに、昭和46



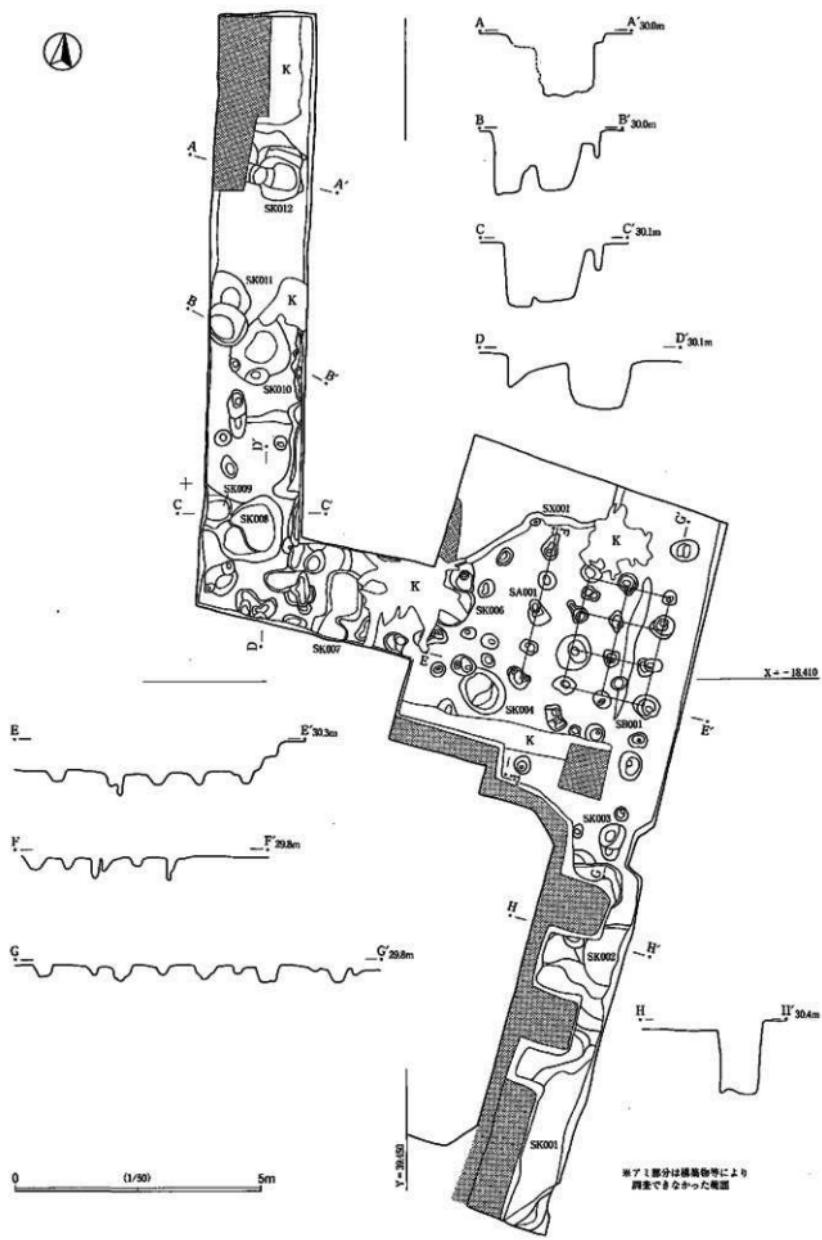
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

年には、早稲田大学考古学研究室が塔跡と金堂跡の一部を調査した。同研究室や（財）印旛都市文化財センターの調査を経て、昭和63年には（財）千葉県文化財センターによる寺域確認調査、平成元年には多字邦雄による社殿建て替えに伴う調査が行われた。一方、昭和46年に龍角寺瓦窯跡（2）、平成元年に五斗磧瓦窯跡（3）の調査が実施され、龍角寺から出土した屋瓦と同様、三重圓錐単弁八葉蓮華文の軒丸瓦、三重弧文の軒平瓦が生産されており、龍角寺への供給瓦窯が明らかとなった。

本遺跡周辺では、古墳時代から奈良・平安時代にかけての重要な遺跡が調査されている。古墳時代には、110基以上の古墳で構成される龍角寺古墳群（国指定時竜から龍へ変更）が本遺跡の南側、印旛沼を望む台地上に展開する。このなかでは、全長78mの終末期前方後円墳である浅間山古墳（4）と1辺79mの規模を有する終末期大型方墳である岩屋古墳（5）が注目される。浅間山古墳は、龍角寺からいわゆる「白鳳道」を南に下った位置にあり、その関連性が窺える。また、岩屋古墳は、初期寺院と終末期大型方墳のセットが後の郡衙に影響を及ぼしている例から、その典型と考えられる。奈良・平安時代になると、律令期の壇生郡衙と推定される大畠Ⅰ遺跡（6）や、郡衙に関連する集落と考えられる向台遺跡（7）などが調査され、郡衙及び周辺の状況が次第に明らかになりつつある。



第2図 調査区域と周辺の地形 (1/2,500)



第3図 遺構分布図

## 第2章 検出された遺構と遺物

### 第1節 奈良・平安時代

調査区が龍角寺の塔心礎の南側に位置することから、同寺に関連する遺構の存在が想定されたが、検出された遺構は、覆土状況などから近世以降と思われ、当該期の遺構は確認されなかった。ただ、調査区内の表土中を主体に多くの龍角寺に伴う屋瓦が出土した。瓦は小破片が多く、接合資料がほとんどないことから、近世以降に一括して人為的に投棄されたものと思われる。瓦を概観すると、平瓦が圧倒的に多く、次いで丸瓦がある程度みられる。軒丸・軒平瓦は少なく、他に判読の困難な文字瓦や道具瓦などが認められる。なお、各種の瓦の分類については、龍角寺五斗蔵瓦窯<sup>(1)</sup>の分類を当てはめた。

#### 軒丸瓦（第4図、図版2）

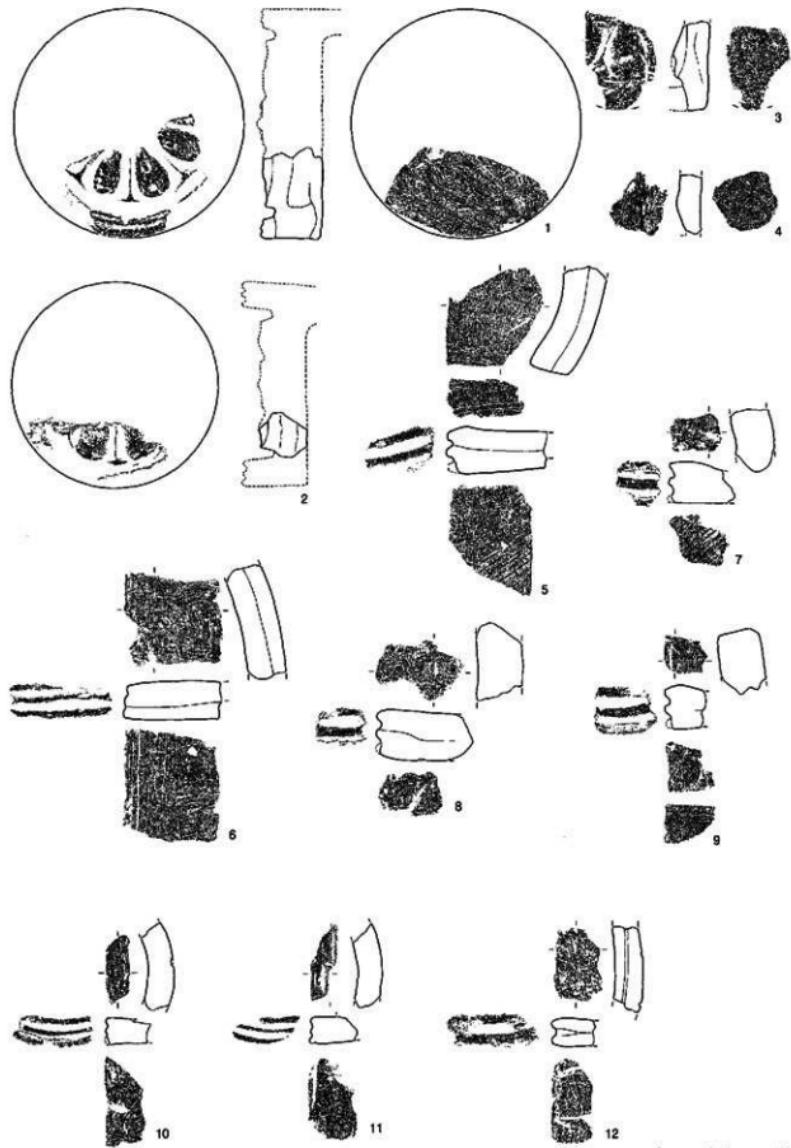
小破片も含めて6点みられる。1は蓮弁と外区の圍線の一部が残る。三重圍線単弁八葉蓮華文瓦で、蓮弁は1cm程の厚みがあり、剥離のため不鮮明であるが子葉を有する。弁端は強く反り返る。蓮弁間に強い稜を有する間弁が形成され、弁端を繋いでいる。外区は蓮弁の高さとあまり変わりない。五斗蔵瓦窯の外区の高さは、内区よりかなり高く保たれている点が大きく異なる。三重の圍線は摩耗のため低くなっている。瓦当裏面の調整はヘラケズリ、側面はヘラケズリ後ナデが加えられる。本資料は、丸瓦取り付け部がないことから、下位部分の瓦片と思われる。2も1と同様の軒丸瓦であるが、外区が内区より高く作られており、五斗蔵瓦窯に近いタイプである。1・2とも中央の蓮子を欠くが、五斗蔵瓦窯の例をみると、瓦当面の厚さ3.2~3.8cmのものが、中央1+周囲5の蓮子（軒丸瓦I類）、約5.5cmが中央1+周囲10の蓮子（軒丸瓦II類）となっており、これに当てはめれば、1・2は軒丸瓦II類となろう。3・4は蓮弁の一部、5・6は外区の一部である。

#### 軒平瓦（第4図、図版2）

軒平瓦はすべて型挽きの三重弦文であるが、小破片主体のため額部の形状等不明な点が多い。五斗蔵瓦窯では、額部が短く平瓦部凸面に叩き目を残すものをI類、額部が長く、段額を呈し、凸面ナデ調整の一群をII類としている。この分類を当てはめると、本資料の多くはII類に相当すると思われる。7は段額の痕跡が認められ、厚さ3.5cmを測る。凸面に平行叩きが確認されており、I類となろう。焼成は良好で、灰白色を呈する。8も同タイプの軒平瓦である。9も段額があるものの、厚さ3.0cmとやや薄くなる。凸面はナデ調整されるが、平行叩きの痕跡が部分的にみられる。II類となろう。6・9の額部の長さは7cmから8cmを測る。五斗蔵瓦窯の軒平瓦は、I類が長さ3.5cm、II類が5.5cmほどであり、本遺跡のように長いものは認められない。色調は、7・8以外は茶褐色を呈し、焼成はあまりよくない。

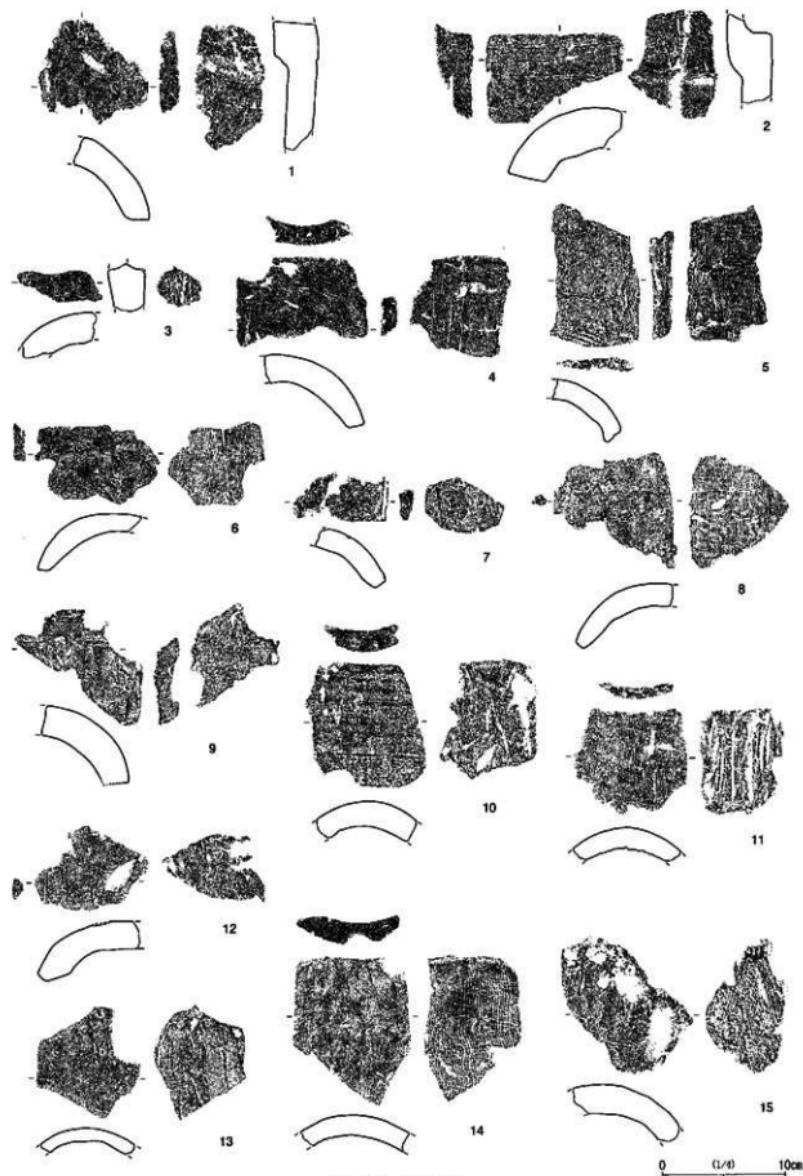
#### 丸瓦（第5・6図、図版3）

丸瓦の出土量もあまり多くないが、凸面をナデ消すものが主体を占める。五斗蔵瓦窯では、丸瓦を2つに分類し、I類は凸面を丁寧にナデ消す一群で、II類は凸面に平行叩きを施す一群としている。この分類に当てはめると本調査区の丸瓦の多くはI類に属し、1~21は粘土板作りのI類、22~26は粘土紐作りのII類となる。1~3は玉縁式の丸瓦で、2・3には段が明瞭に残る。いずれも凸面は丁寧なナデ調整、凹面には布目痕がみられる。厚さ2.2cmを測る。色調は1・2が茶褐色、3は黒灰色を呈する。4~21は凸

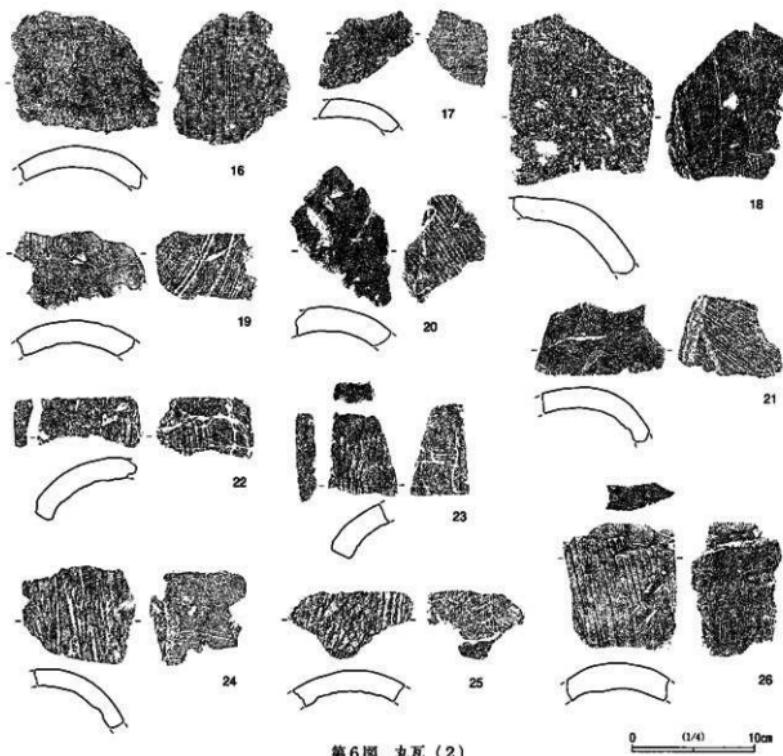


第4図 軒丸瓦・軒平瓦

0 (1/4) 10cm



第5図 九瓦(1)



第6図 丸瓦(2)

面がナデ調整される一群で、全容を窺える資料はないが、行基式になると思われる。凹面にはすべて布目がみられ、部分的にケズリやナデが加えられるものが多い。色調は灰褐色を呈するものが多く、8など赤褐色の焼き上がりのものもいくつかみられる。4は唯一凹面の布目痕をケズリで消している。厚さ2.3cmと厚い部類に含まれる丸瓦で、不鮮明ではあるが、断面状況から薄い粘土板を3枚ほど重ねているようと思われる。5の側縁部には凸凹面の粘土のはみ出しが残り、広端面の調整は雑である。部分的ではあるが、凹面の布目痕に被さるように粘土がみされることから、切り離し後粘土を補填したものと思われる。厚さ1.6cmを測り、丸瓦の中では薄い部類に入る。胎土中に細かな白色砂粒を多く含み、焼き上がりは硬質である。22~27は凸面に平行叩きが施される一群である。22の平行叩きにはナデが加えられ、凹面には布目端部の解れが観察される。側縁部・広端部とも丁寧にヘラケズリされる。胎土中に白色砂粒を多く含み、青灰色で硬質である。23も硬質で、布の解れがみられる。25は布目の跡りが窺われ、木枠の痕跡が部分的にみられる。

#### 平瓦

出土した瓦のほとんどが平瓦である。ここでは、五斗萬瓦窯の分類を当てはめて説明する。凸面の整形

技法から、格子叩きを施すものをⅠ類、ナテ調整を加えるものをⅡ類、縄目叩きを施すものをⅤ類としている。なお、凸面に平行叩きを残し、分割方法により3分割をⅢ類、4分割をⅣ類としているが、本遺跡の瓦は小破片が多く分類困難なため、ここではすべてⅢ類とした、そのため説明の中でⅣ類は抜けている。

#### 平瓦Ⅰ類（第7・8図、図版4）

平瓦全体の約14%の出土割合で、斜格子叩き（1・2など）と正格子叩き（10・30など）に分けられるが、前者の叩きが圧倒的に多い。格子目の大きさは、斜格子叩きがほぼ同様であるのに対し、正格子には大（10・30）小（33・35）みられる。34・37は格子目が長方形状を呈する。また、36は長方形状の格子目がきわめて小さい。側縁はヘラケズリにより調整され、凸面ないし凹面に面取りが施される。凸面の面取りは1・2・12と少ないのに対し、凹面の面取りは、3・4・6・7・10など多くみられる。

#### 平瓦Ⅱ類（第9～14図、図版5）

平瓦のなかでは最も出土量が多く、平瓦全体の約50%を占める。凸面はナテ調整されるため、もとの叩きについては不明なものがほとんどであるが、90は格子叩き、70は縄文、18は平行叩きなど、地文として各種の叩きが用いられていることがいくつかの資料から窺える。凹面は無文となるものは少なく、布目痕あるいは布目痕に糸切りを加えたものがほとんどである。五斗蔵瓦窯のⅡ類は、凹面が無文となるものが圧倒的に多く、逆の様相を呈する。側面及び端部はヘラケズリにより面取りが施される。1は玉縁平瓦と思われ、縁の幅は3cmほどを測る。内面には布目痕が残る。

#### 平瓦Ⅲ類（第14～16図、図版6）

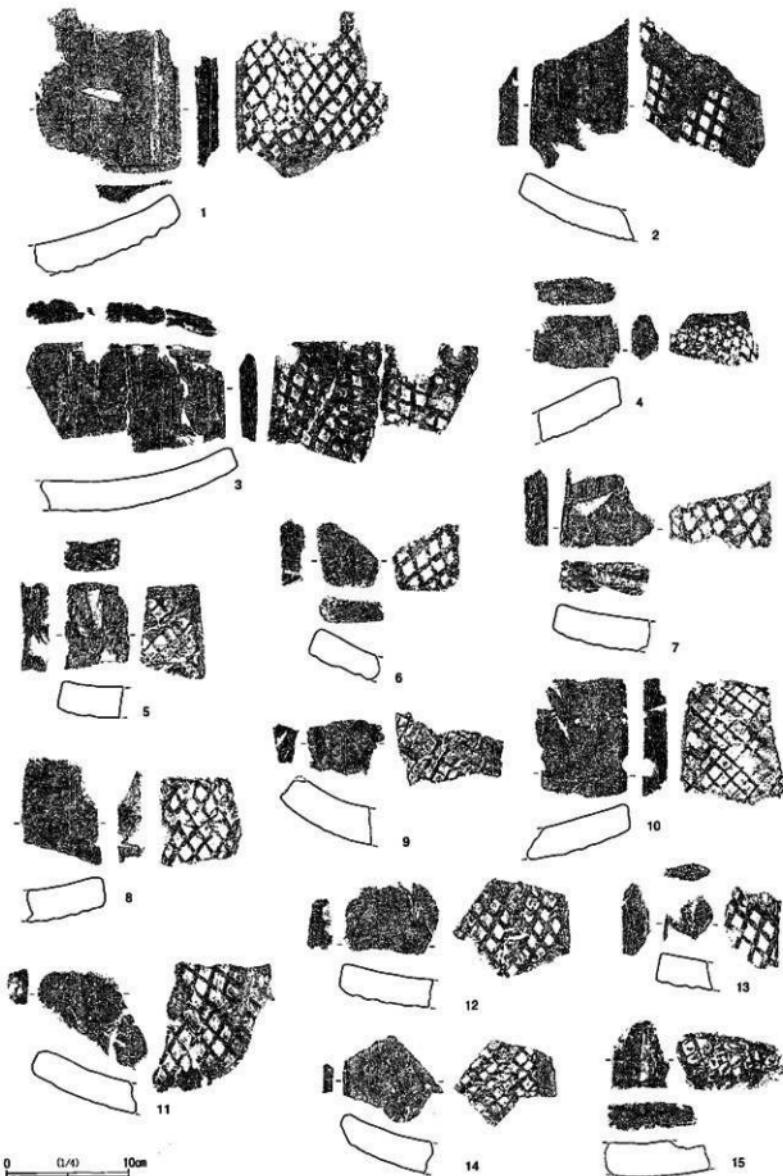
前述したように、五斗蔵瓦窯で平行叩きを分割単位でⅢ・Ⅳ類と分類しているが、今回の調査で出土したものは全容を窺える資料が少なくすべてⅢ類とした。出土した平瓦の約16%を占め、凸面に使用した叩き目は、単純に平行となるものが多いが、幅の広いものと狭いものの両者がみられる。他に、平行線と直交するように木目が残る擬格子状のタイプが僅かに認められる。叩きの方向は、側縁に対して斜位あるいは平行になるものがほとんどである。凹面調整は、布目痕や棒板圧痕を残し、後にヘラケズリを加えるものもみられる。ヘラケズリの方向は、狭端部から広端部へのものが多い。22・25は側縁に対して平行叩きが直交するタイプで、叩きの幅も狭く、雑な叩きの感を受ける。10は平行線の間の木目と考えたが、Ⅰ類の長方形格子叩きの可能性もある。

#### 平瓦Ⅳ類（第16～18図、図版7）

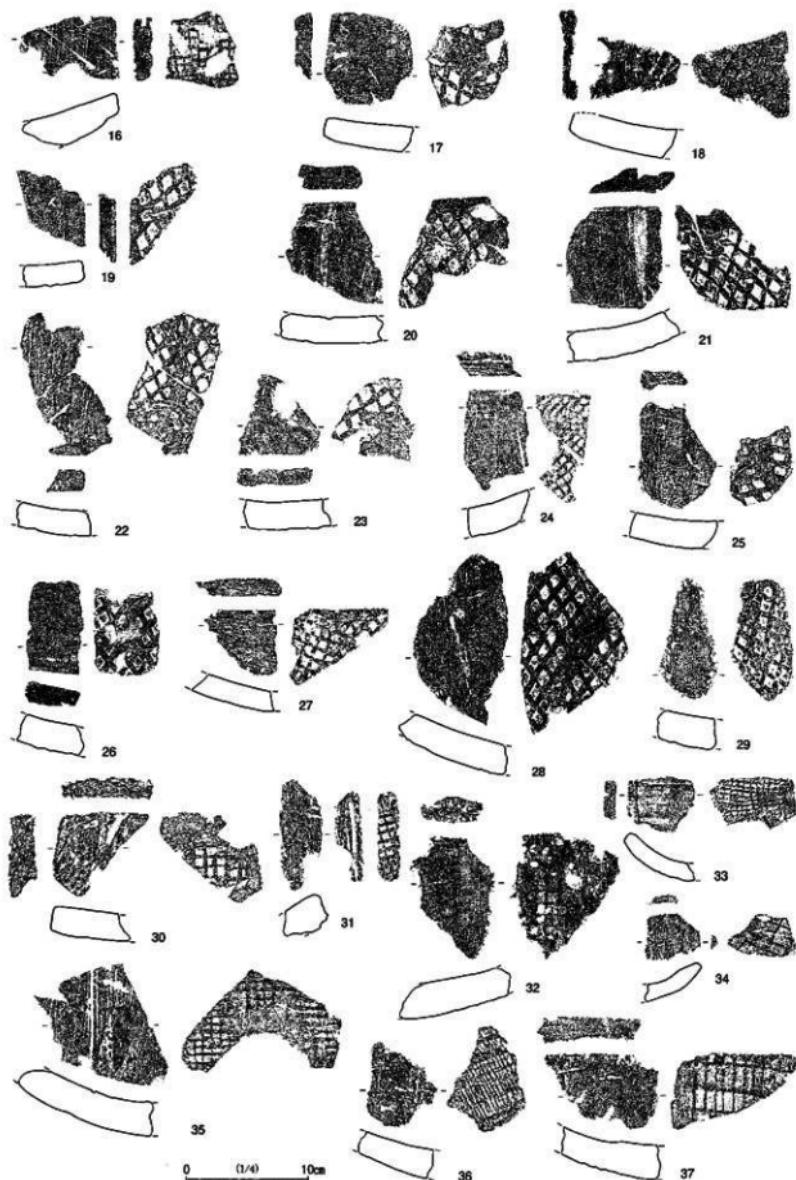
平瓦Ⅳ類に次いで出土量が多く、平瓦全体の約20%を占める。凸面に縄文、凹面に布目痕が残り、内面無文となるものはみられない。叩きの縄文は、2や5・21など単節となるものは少なく、多くは無節あるいは撚り糸状となるものである。1は玉縁で、縁部には不鮮明ながら間隔の広い撚り糸がみられる。縁の幅は5cmほどである。2の凹面には布目痕が残り、広端及び側縁側にヘラケズリが施されるが、凸面にはみられない。広端部面はヘラケズリされるが、布目痕が残る。49は凸凹面とも布目痕が残る特異な平瓦である。

#### 文字瓦・道具瓦（第19図）

1～14は文字瓦であるが、小片で残画のみのため判読することは困難である。3は平瓦Ⅰ類の凹面に刻まれる。15・16は道具瓦で、15は面戸瓦、16は隅切り瓦と思われる。17は沈線と刻みがみられるが、用途不明である。18～23は平瓦の側縁に研磨を加えている。後世の転用砥石と思われるが、道具瓦の一部の可能性もある。



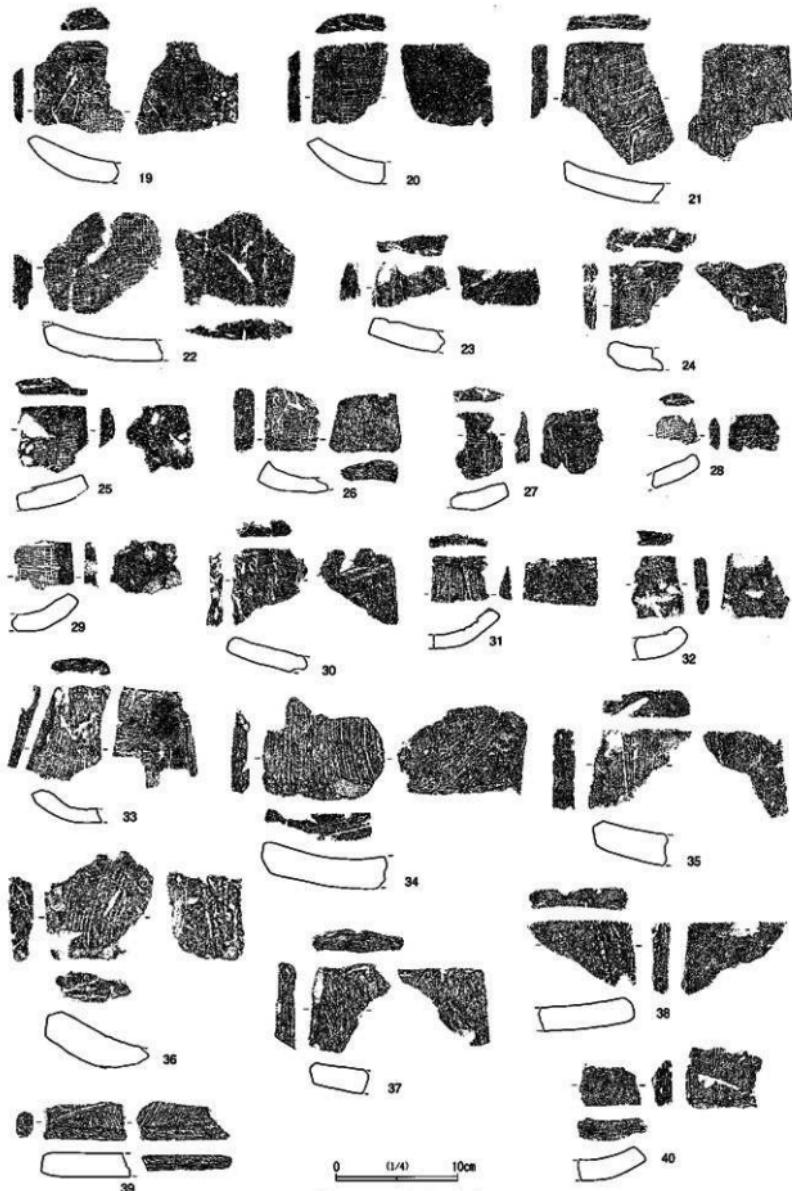
第7図 半瓦 I類 (1)



第8図 平瓦I類(2)



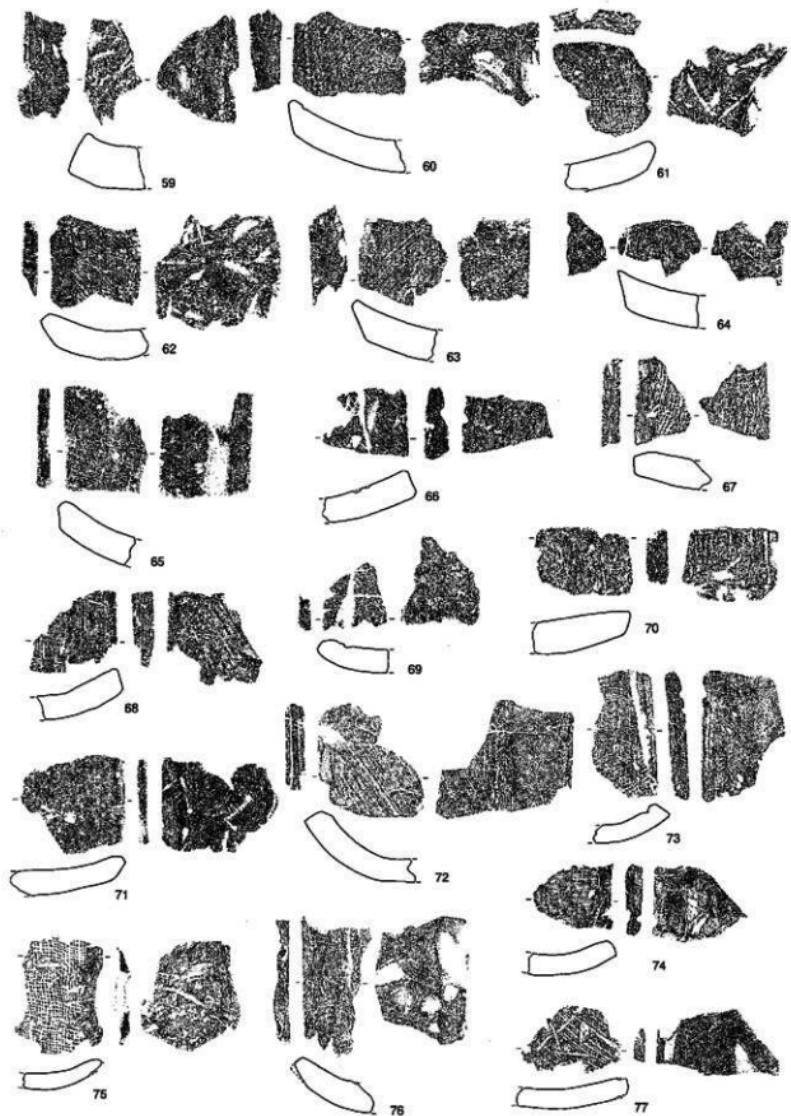
第9図 平瓦Ⅱ類(1)



第10図 平瓦Ⅱ類 (2)

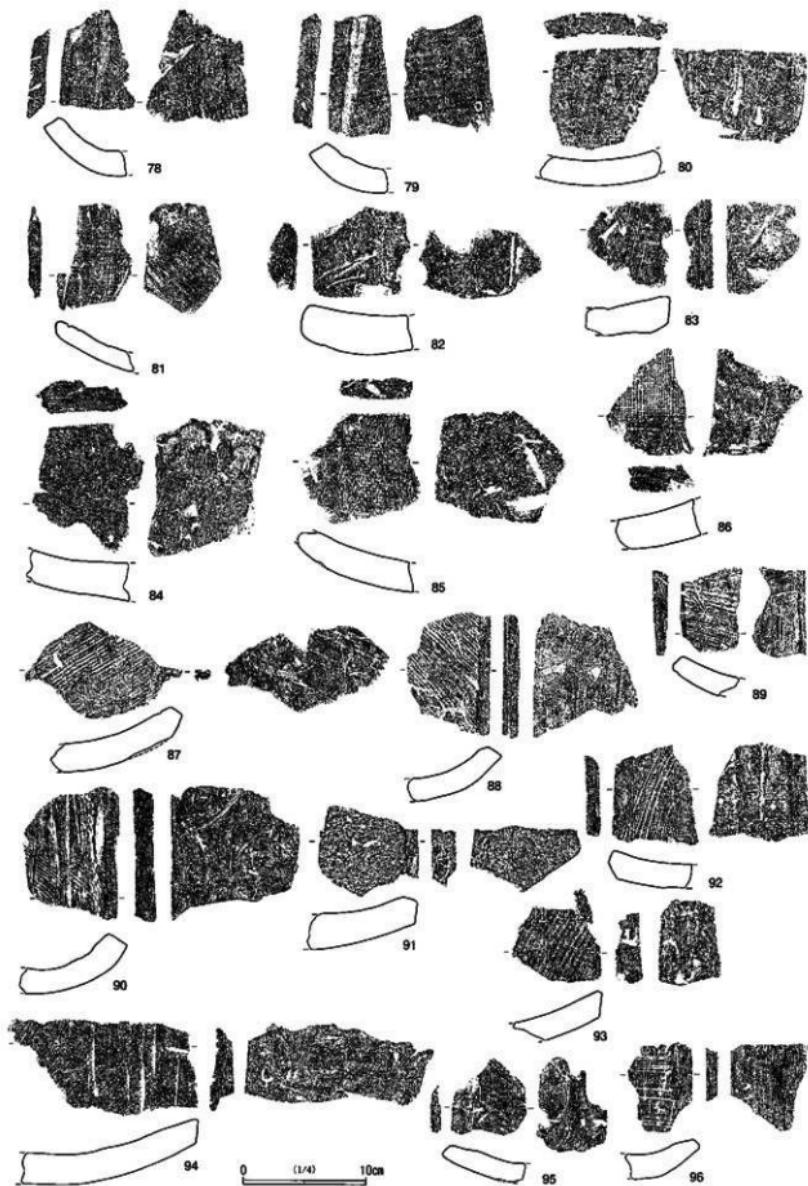


第11図 平瓦 II類 (3)

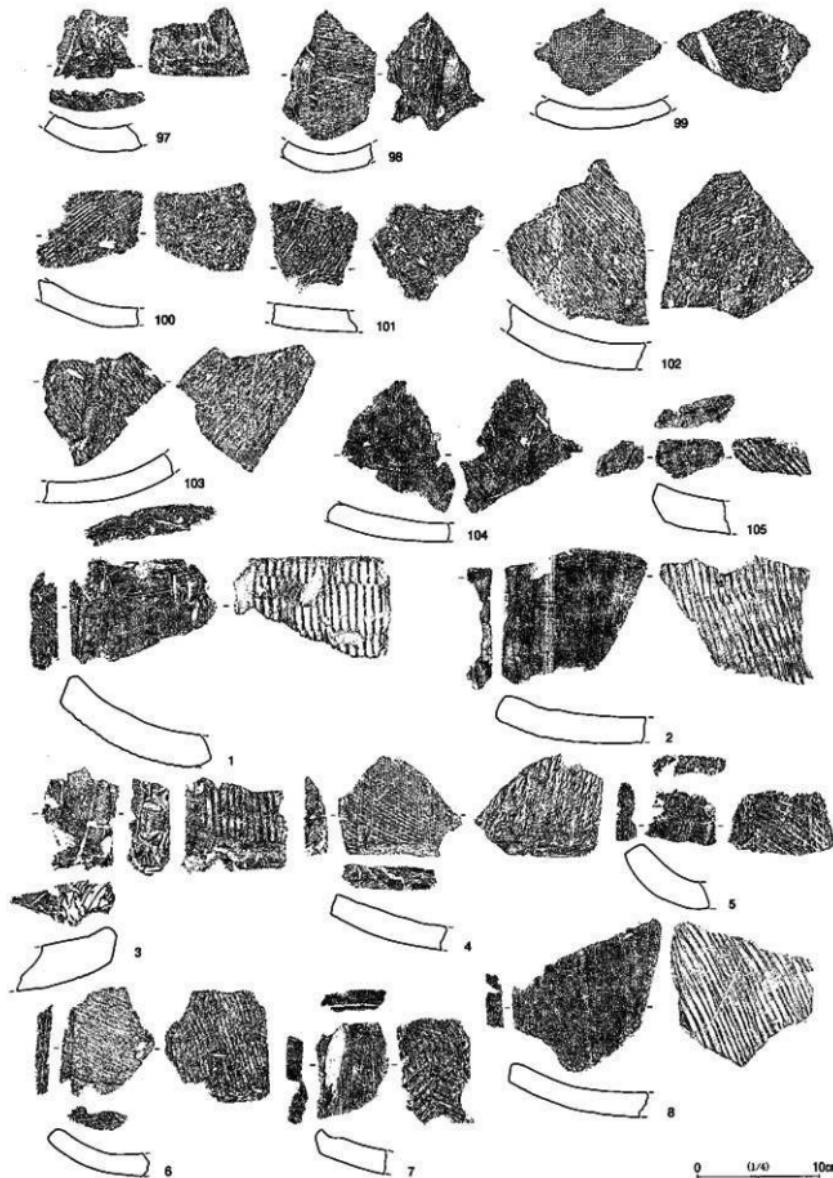


第12図 平瓦Ⅱ類 (4)

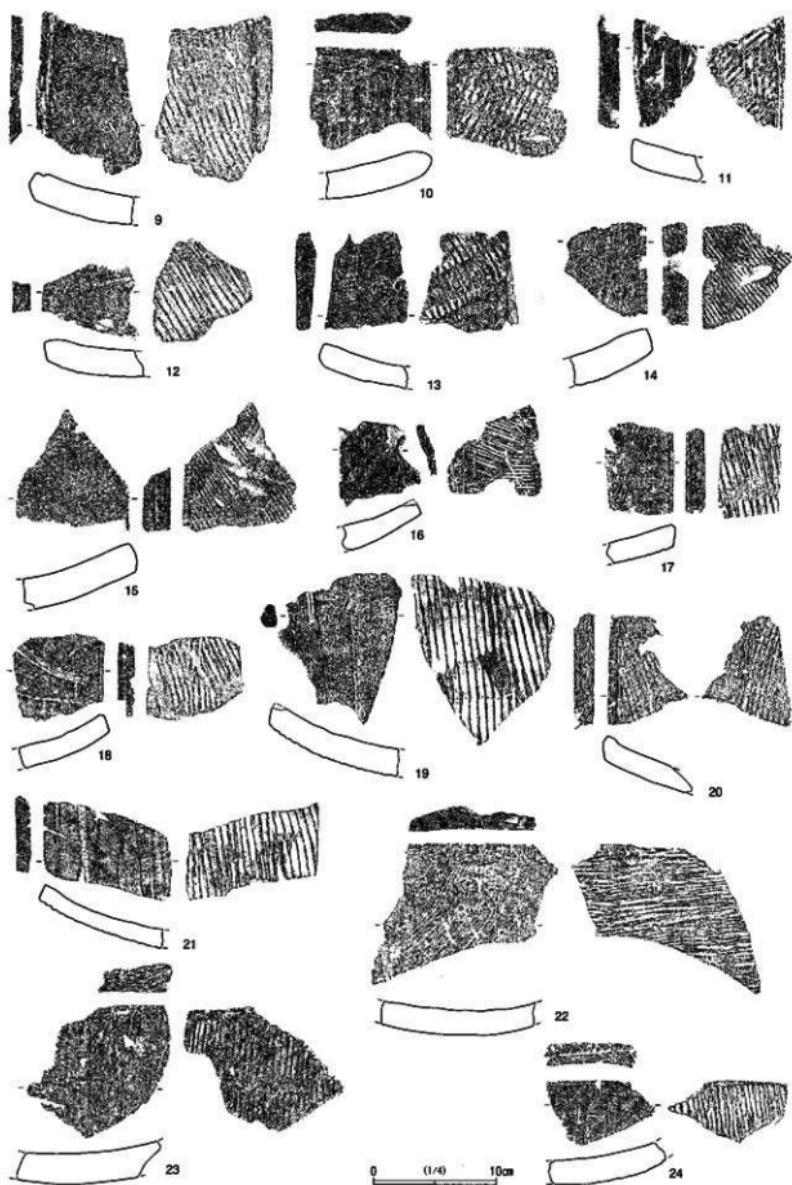
0 (1/4) 10cm



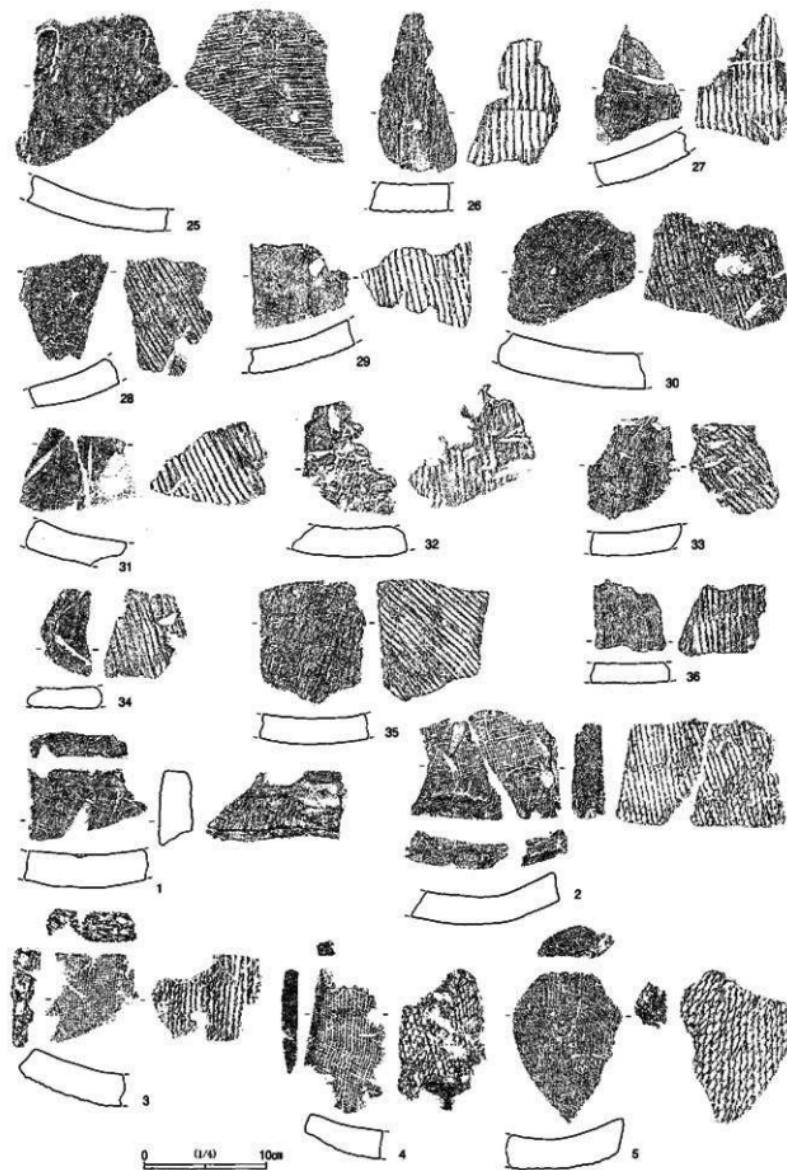
第13図 平瓦II類(5)



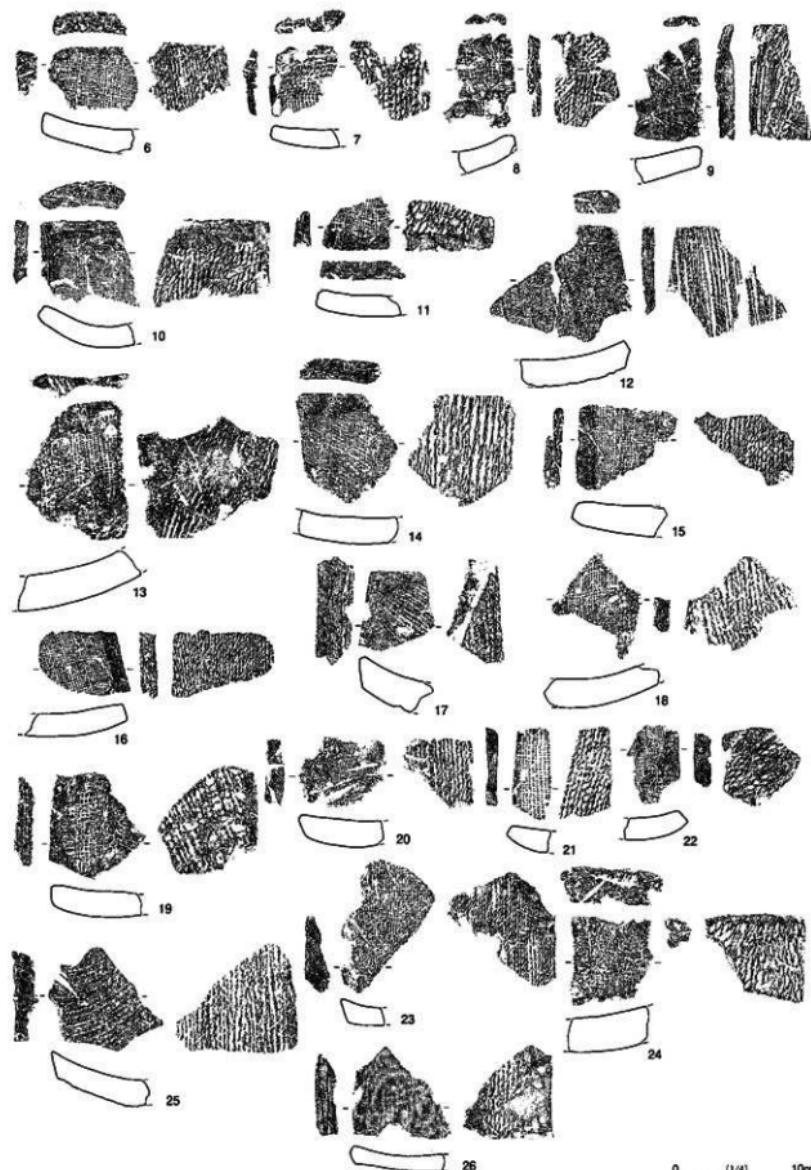
第14図 平瓦Ⅱ類 (6)・平瓦Ⅲ類 (1)



第15図 平瓦Ⅲ類 (2)



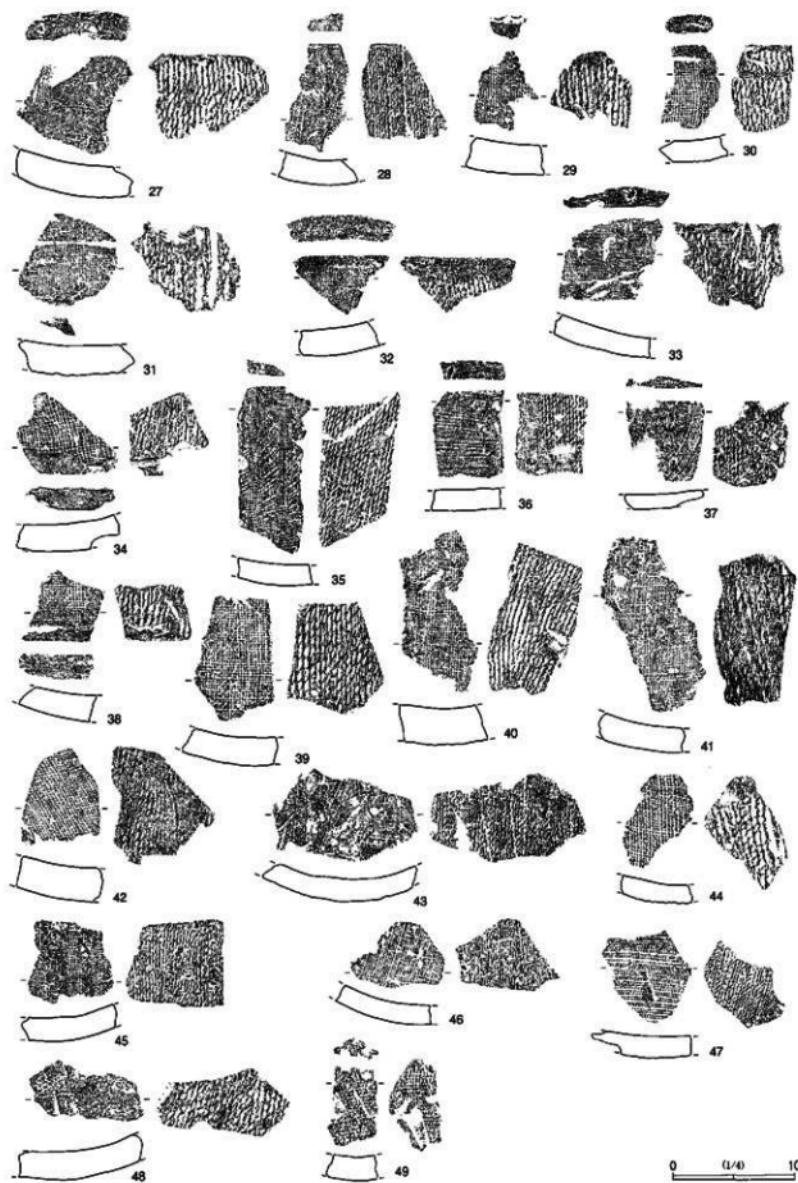
第16図 平瓦III類(3)・平瓦V類(1)



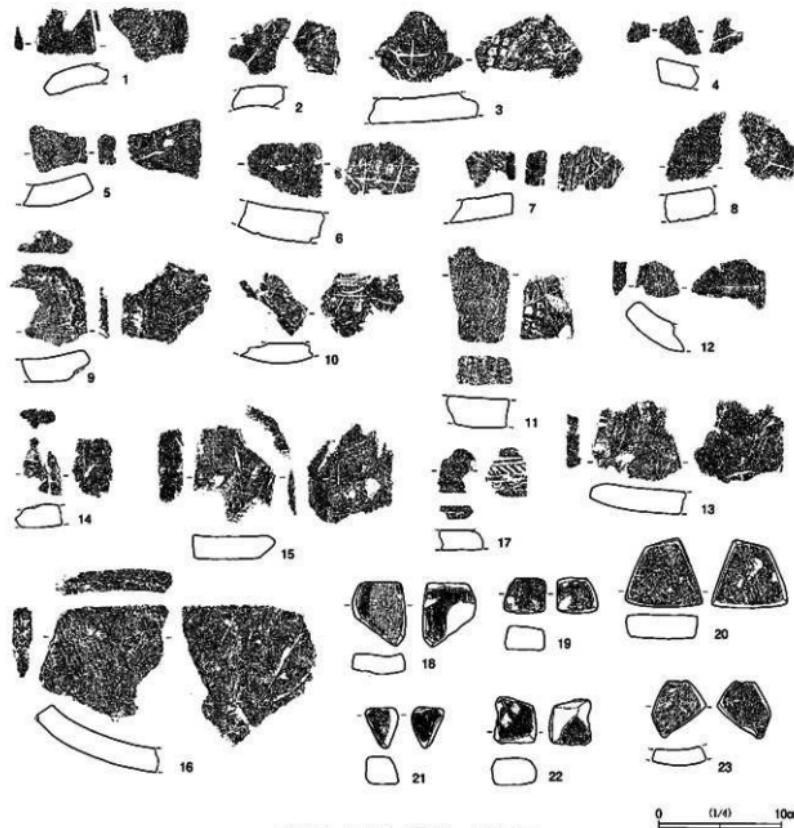
第17図 平瓦V類 (2)

- 20 -

0 (1/4) 10cm



第18図 平瓦V類 (3)



第19図 文字瓦・道具瓦・転用砥石

## 第2節 近世以降

本調査区から検出された遺構はすべて近世以降の所産と思われる（第3図）。B区に位置するSX001は、地山を10cmほど掘りくぼめた台地整形形状遺構で、内部に遺構が存在する。SB001は総柱の掘立柱建物跡と思われ、柱穴の掘り方は、径0.4~0.5m前後、深さは0.3m前後を測る。覆土はローム粒・ロームブロック主体で縫まりは不良である。SA001はSB001の西側を区画する堀の柱掘り方と思われる。SK002は大形土坑、SK008・010・012は地下式坑の形状を示す。他の遺構も含めてこれらの遺構は覆土に縫まりがなく、近世以降に掘り込まれたものと推測される。出土遺物としては、近世以降の陶器や磁器が比較的多くみられるが、ここでは省略した。

### 第3章 まとめ

龍角寺境内内部の調査のため、当該期の遺構の存在が期待されたが、検出された遺構群は、近世以降の墓地などであった。ただ、調査区内からは龍角寺に葺かれていたと思われる多量の屋瓦が出土している。ここでは、出土した屋瓦について検討を加える。

まず、軒丸瓦であるが、今回の調査である程度推定できる資料は三重圓錐单弁八葉蓮華文瓦2点のみである。龍角寺や供給瓦窯でこれまで知られている軒丸瓦は、内区中央の蓮子数に大きな違いがある。蓮子数中央1+周囲5と中央1+周囲10の両者がみられる。五斗蔵瓦窯では、前者を軒丸瓦I類、後者をII類としている。今回の調査で出土した軒丸瓦はいずれも三重圓錐单弁八葉蓮華文瓦で、瓦当面の厚さから蓮子は中央1+周囲10と想定され、五斗蔵瓦窯II類に属するものであろう。五斗蔵瓦窯の報告では、間弁端部の蓮弁との取り付け幅の検討から、II類がI類の範型を影り直したものであるとしている。その点からみると、今回の資料は後出の軒丸瓦となろう。一方、第4図1と2の違いは、内区と外区の高さの差に明確に表れている。1がほぼ同じ高さであるのに対し、2の内区は外区より低くなる。2は五斗蔵瓦窯のII類に通有にみられるが、1のように外区と内区の高さが同様になるタイプは同瓦窯にはみられない。龍角寺瓦窯<sup>(2)</sup>に存在する可能性は否定できないが、詳細は不明である。下総町龍正院瓦窯1号窯<sup>(3)</sup>から出土している「龍角寺式」軒丸瓦は外区と内区の高さの差が少ないものが多いが、中央の蓮子数が1+8であり、本調査区内の軒丸瓦とは異なる。もちろん、今回の調査で出土した軒丸瓦は中央の蓮子数まで確認できるものがないため確証はないが、龍正院瓦窯の屋瓦が龍角寺に持ち込まれたとは考えにくい。むしろ、五斗蔵瓦窯や龍角寺瓦窯以外の龍角寺への供給瓦窯が存在する可能性も考えられよう。次に、軒平瓦は三重弧文の瓦当面を有し、調整からみると五斗蔵瓦窯のI・II類に相当するが、頭部の長さが7~8cmと長くなり、五斗蔵瓦窯より長くなる。このタイプは、龍角寺瓦窯1号窯で出土しており、同瓦窯の製品となる可能性が高い。

九瓦は、凸面無文となる五斗蔵瓦窯I類がほとんどで、僅かに平行叩きを施すII類が含まれる程度である。丸瓦の多くは五斗蔵瓦窯や龍角寺瓦窯と類似するが、3点出土した有段の玉縁丸瓦は瓦窯資料としては確認されなかったものである。未発表ではあるが、龍角寺の表採資料として玉縁丸瓦があるという指摘もあり<sup>(4)</sup>、龍角寺屋瓦に玉縁丸瓦が使用されていた可能性は想定できる。ただ、五斗蔵瓦窯や龍角寺瓦窯の製品ではなく、軒丸瓦同様別の供給瓦窯の存在を考えたい。出土瓦の主体となる平瓦は、前述したようにIII・IV類の分割はできずにすべてIII類としたが、五斗蔵瓦窯分類のI類からV類まですべてみられる。一括廃棄したような出土状況のため、比率を示すのはあまり意味がないかもしれないが、II類が約半数を占めている。五斗蔵瓦窯では、出土した平瓦の約70%をII類が占めるに対し、龍角寺瓦窯では平行叩きを施すIII・IV類が約半数を占め、II類は相対的に少ない。この点では、今回調査の平瓦は五斗蔵瓦窯の様相に近くなる。一方、玉縁の平瓦がII類に1点、V類に1点みられる。類似資料は龍角寺確認調査<sup>(5)</sup>で1点出土しており、報告では嬢羽瓦の可能性を示しているが、今回の資料はその横断面形からみると、嬢羽瓦になるものではなかろう。玉縁丸瓦の存在を考え合わせると、やはり別の供給瓦窯が浮かび上がってくる。

- 註1 石戸啓夫・小牧美知江 1997『龍角寺五斗蔵瓦窯跡』財団法人印旛都市文化財センター
- 2 須田 努 1998「龍角寺瓦窯跡」「千葉県の歴史 資料編考古3（奈良・平安時代）」千葉県
- 3 深谷昌良ほか 1984「下総・龍正院瓦窯跡群」立正大学文学部考古学研究室
- 4 市立市川考古博物館山路直充氏よりご教授頂いた。
- 5 大原正義ほか 1989「栄町龍角寺確認調査報告書」千葉県教育委員会

# 写 真 図 版



調査前風景



SX-001全景



A区全景



1表



1裏



2表



2裏



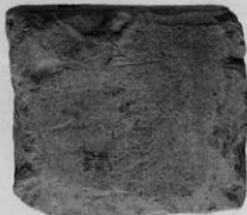
5表



5裏

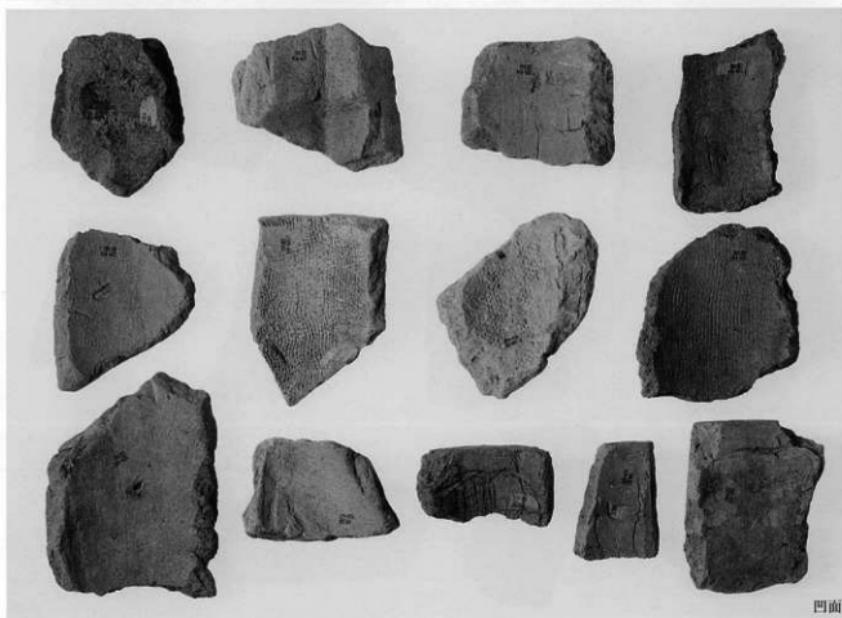
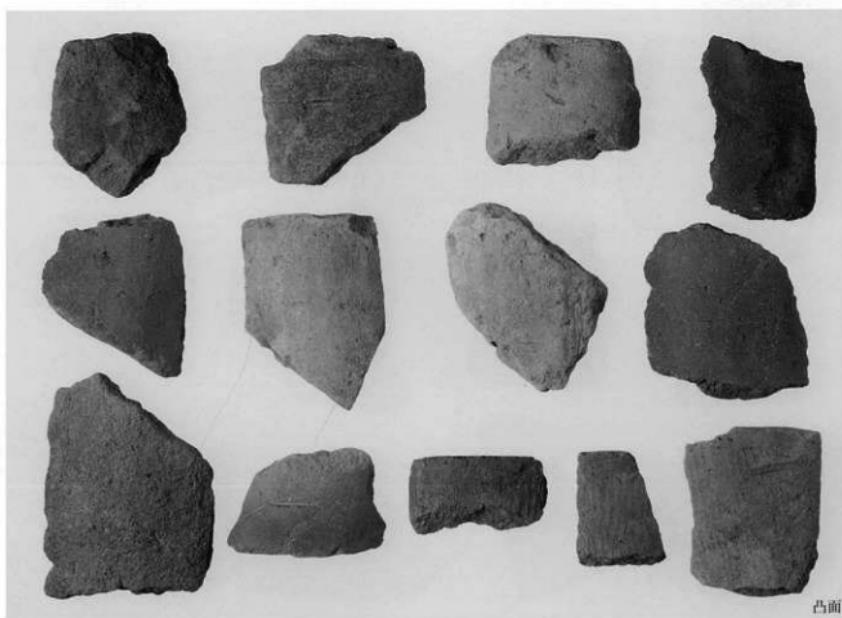


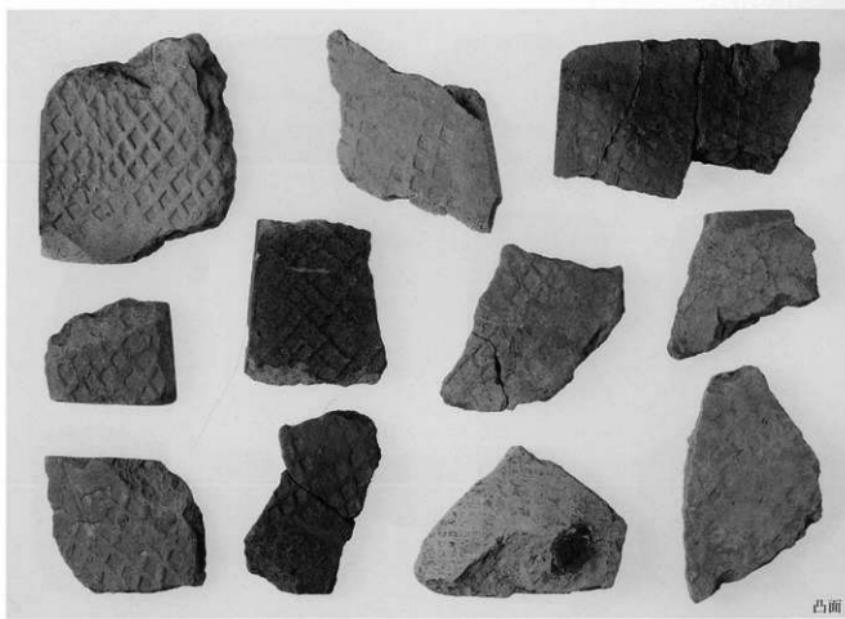
6表



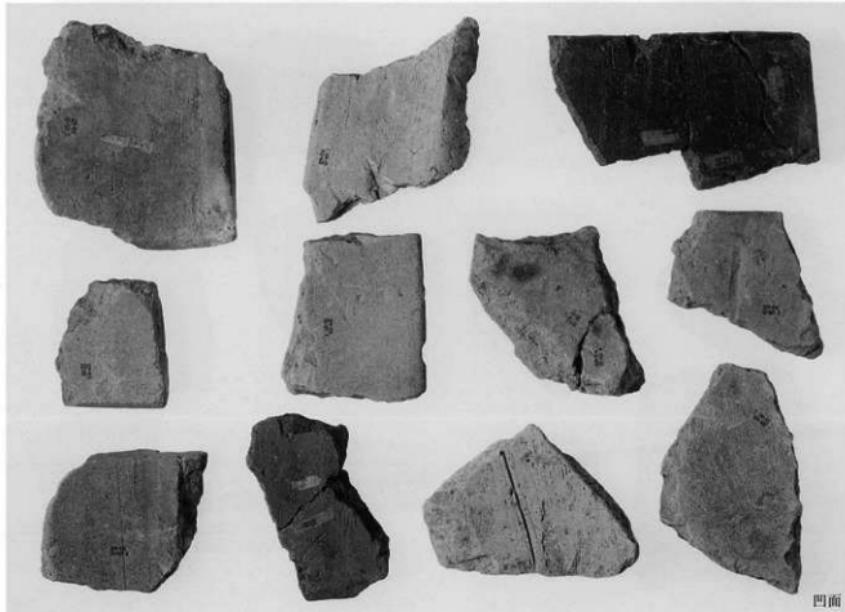
6裏

軒丸瓦・軒平瓦



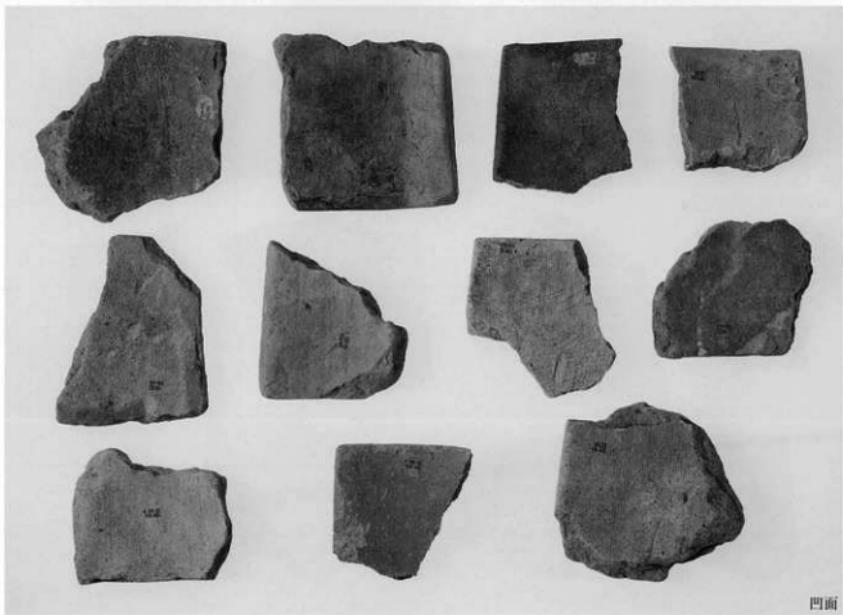
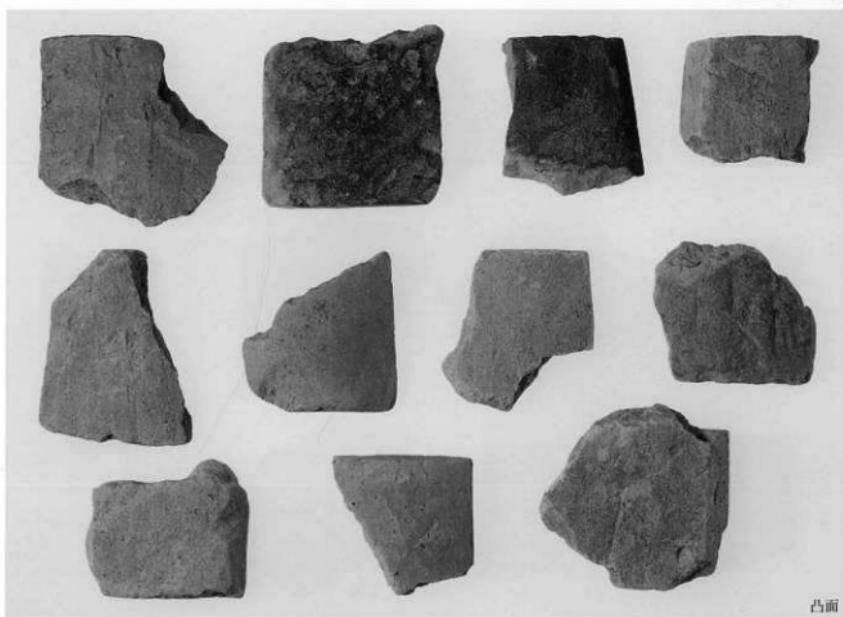


凸面

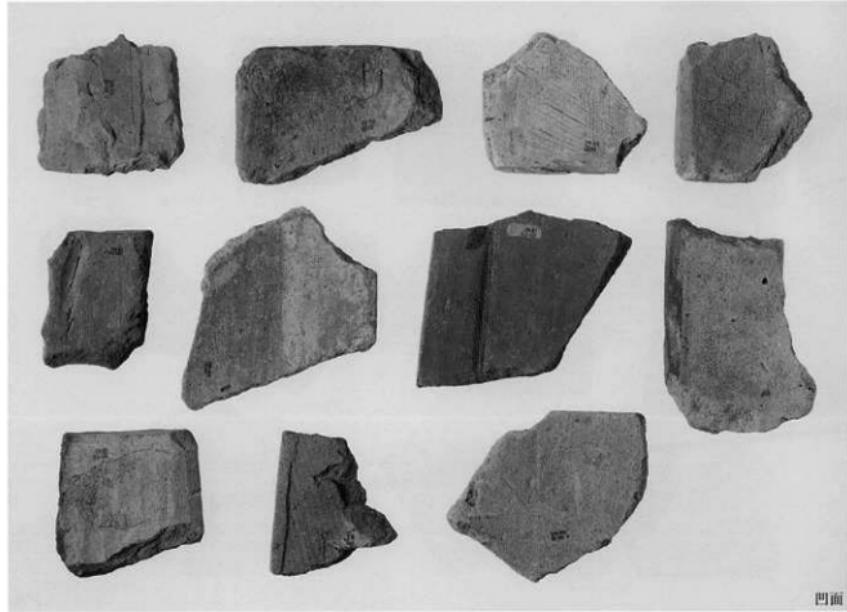
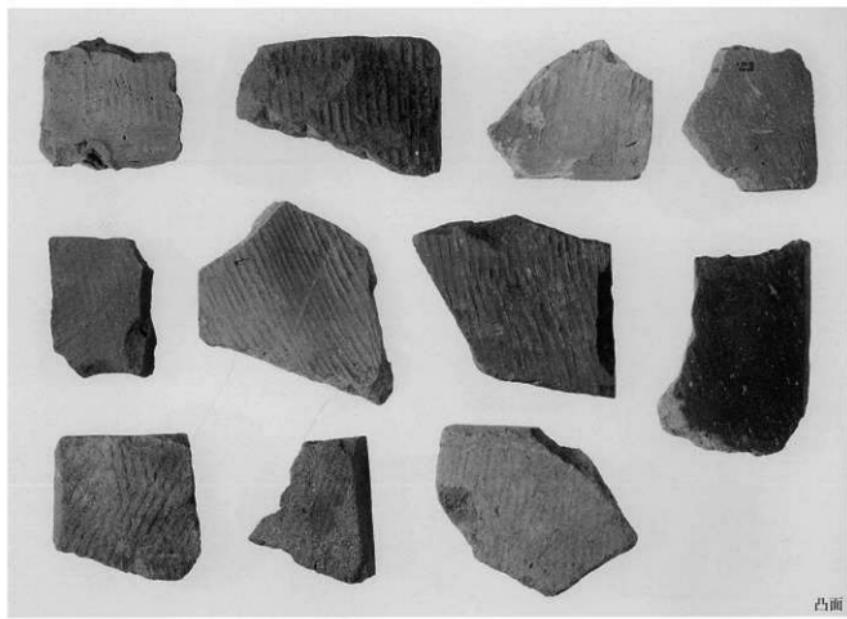


凹面

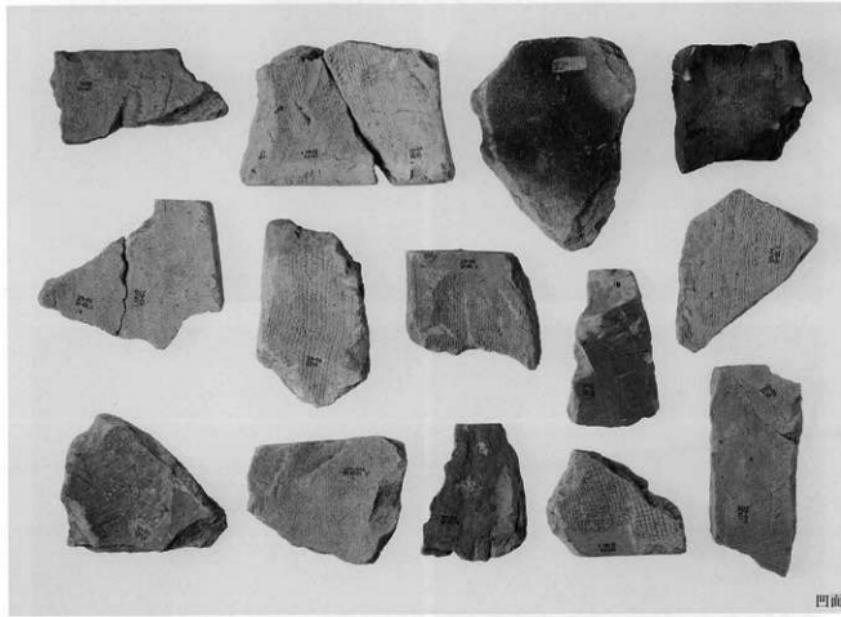
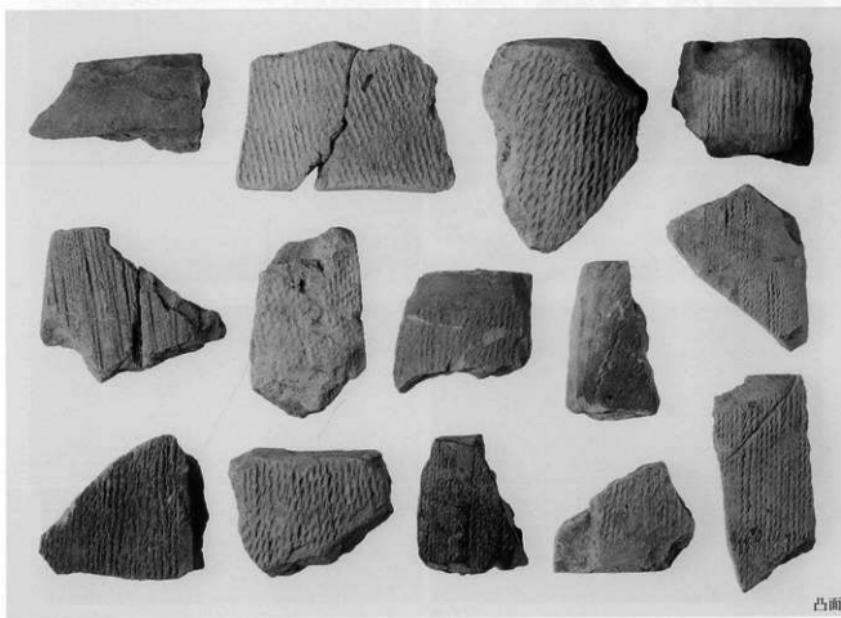
平瓦 I類



平瓦Ⅱ類

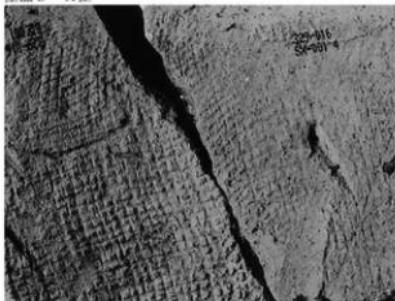


平瓦Ⅲ類

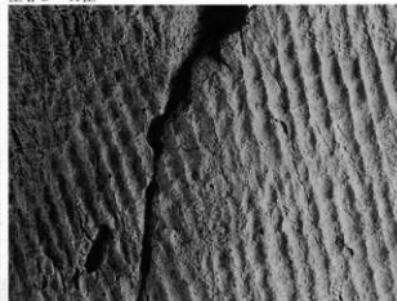


平瓦V類

平 V - 2 反面



平 V - 2 正面



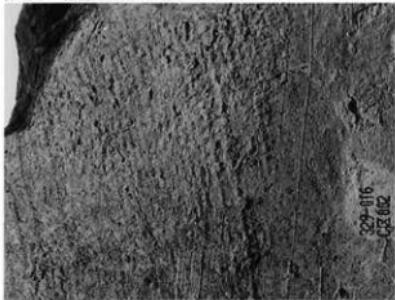
平 III - 2 反面



平 III - 2 正面



平 II - 2 反面



平 II - 2 正面



平 I - I 反面



平 I - I 正面



報告書抄録

千葉県教育振興財団調査報告書第622集

栄町龍角寺跡

—首都圏自然歩道整備事業埋蔵文化財調査報告書—

平成21年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団  
文化財センター

発 行 千葉県環境生活部  
千葉市中央区市場町1番1号

財団法人 千葉県教育振興財団  
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 正文社  
千葉市中央区都町1-10-6